



No.37

NABUNKEN NEWS

Jun.2010



独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町丁8番2号
<http://www.nabunken.jp/>

■ 第一次大極殿完成記念式典挙行

2010年4月23日、8年の歳月を費やして建設が進められてきた平城宮第一次大極殿復原建物の完成式典が、皇太子殿下をお迎えして厳粛に挙行されました。ちょうど1300年前の和銅3年（710）3月10のこと、時の天皇、元明女帝は奥を連ねて、藤原京から新都平城京へ遷都します。4月23日は旧暦の3月10日あたります。

1971年に、第一次大極殿地区の発掘調査が実施されました。周囲よりも高い地形のこの一帯は地質時代の第四紀に形成された固い粘質の地盤が造構面であり、発掘調査で検出されたのは、整然と配置されたおびただしい数の柱掘方群で、これらはのちに、奈良時代後半に造営された西宮という大規模な宮殿群であることがわかりました。「平城宮跡第72次北」調査も最終段階の「だめおし作業」の行われた7月15日、木曜日の調査日誌に、「東西に縱走する大溝を地山まで掘り進めたところ、溝をば中央で東西に長く分ける段がかすかではあるが残っていた。またこの溝が3ヶ所で北へ方形に張り出しており、張り出し部のつけねにはそれぞれ柱穴が見いだされる。以上から、この張り出しがあるいは階段かそれに類似の施設になる可能性もあり、そうすれば、溝が二つの部分にわかっているのも一つは凝灰岩地覆石抜取穴、一つは雨落溝とも考えられる」と記されています。この断続的に続く溝が第一次大極殿の基壇の形跡であったことは、その後の内部的な研究会である内裏検討会での議論などを重ねた末によく所員共通の認識となります。調査のさなかの時点では、まだ「大極殿」に関わる造構とは明記されていなかったのです。

1978年に恭仁宮大極殿の基壇跡の調査が京都府教育委員会の手でおこなわれたことは、平城宮第一次大極殿の復原研究に勢いを与えました。恭仁宮大極

殿は基壇がほぼそのままの規模で遺存しており、いくつかの礎石も、もの的位置に残されていました。基壇地覆石を抜き取った形跡がかろうじて確認された平城宮第一次大極殿でしたが、基壇の規模が恭仁宮のそれと全く一致したことから、『続日本紀』の、天平12年（740）の恭仁遷都に伴い「平城の大極殿并せて歩廊を壊して恭仁宮に遷造」したという記述の正しさが確認され、建物の柱位置、平面規模も判明したのでした。1982年には第一次大極殿地域の発掘調査についての正報告書（平城宮発掘調査報告XII）が刊行され、第一次大極殿建物の詳細な復原研究の成果も公にされました。

こうした研究の成果をもとに、文化庁を中心として建物復原工事が進められたのですが、その過程にあっても、繰り返し問題点の摘出が行われ、テーマごとに奈文研の研究スタッフを中心に内外の専門家を糾合したチームが組織され、より確実性の高い復原案を追究する作業が最後まで続けられたことは、記憶にとどめておきたいと思います。

（副所長 井上 和人）



皇太子殿下におことばをいただいた完成記念式典

発掘調査の概要

甘樺丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第161次）

甘樺丘は飛鳥川の西岸に位置する標高145mほどの丘陵で、多数の谷が入り込む複雑な地形をしています。『日本書紀』には皇極3年（644）に蘇我蝦夷・入鹿親子の邸宅が甘樺丘に営まれていたことが記されています。調査地は丘の東麓から北西に向かって入り込む谷で、約6000m²の平坦地が広がります。

甘樺丘東麓遺跡では小規模なものも含めて、これまで7回発掘調査をおこなっています。1994年の谷の入口付近での発掘調査では、7世紀中頃の焼土層が確認されました。2005年以降の調査では、谷の中心で7世紀前半に造られたと推定される石垣を長さ34m分確認したほか、掘立柱建物、堀、溝、石敷、石組溝、炉など7世紀から8世紀にかけての遺構を多数検出し、7世紀から大規模な造成をともなう活発な土地利用があったことが判明しています。

今回の調査の目的は、丘陵上部の遺構の有無を確認すること、2008年度の調査で検出した石敷の全容とその背後の斜面の利用状態を明らかにすること、谷の入口部の遺構の様相を明らかにすることの3点です。そのため調査区は斜面、尾根の裾部、谷の入口部の範囲に設定しました。調査は2009年12月から開始し、2010年6月に終了しました。



第161次調査区全景(南東から)

斜面の中腹では、丘陵をめぐるように並ぶ7世紀の柱列を検出しました。裾からの比高は10m、斜面が比較的緩やかになっている部分をさらに平坦にした様子がうかがえます。柱列は柱穴が3基あり、その間に断続的に掘られた溝と、溝の底からさらに掘削された小穴をともないます。柱列は堀などの区画施設と考えられ、丘陵上に何らかの施設が存在することを示唆するものです。甘樺丘東麓遺跡は今回までの調査地の谷だけでなく、丘陵の上にも遺構が広がる可能性が高まってきた。

尾根の裾部では7世紀中頃に石敷が造られ、山側に素掘溝を、谷側に石組溝を備え、山側は段状に造成されていました。また、石敷を造る以前にも溝が掘られていたことを確認しています。

谷の入口部では、掘立柱の建物や堀、竪穴建物を検出しました。遺構面がかなり削られ、細かな時期は不明ですが、7世紀以降に4時期程度の変遷があったと考えられます。調査区南端の下層調査では、7世紀前半の谷の造成や、炭・焼土層の広がりが確認されています。

去る3月20日には現地見学会をおこない、1245名もの方々にお越しいただきました。甘樺丘東麓遺跡では、谷の平坦地の約3分の2にあたる面積を終え、いよいよ谷の全容の解明へと向かってゆきます。

（都城発掘調査部 番光）



斜面中腹で検出した7世紀の柱列(東から)

平城宮東方官衙地区的調査（平城第466次）

今回調査した東方官衙地区は、第二次大極殿院及び東区朝堂院と東院地区の間にある南北に細長い地区です。この地区は、平安宮との対比からみて、國の中核を支える重要な役所の所在が想定される場所です。

そこで、この地区的官衙区画の配置と、区画内の建物配置の解明を目的として、2006年度から水田畔として残った遺存地割を参考にして北から順に6m幅の調査区を東西、南北に設定する方法で調査を実施しています。

過去3回の調査では、中央を南北に流れる基幹排水路を挟んで東西に官衙区画を確認しています。2008年度（平城第440次）には、東側の官衙区画の南端で確認した有機質遺物を多量に含む土坑の全貌を調査しており、その結果、建物建て替えに伴うごみの焼却土坑と分かり、衛府に関わる木簡群や多数の木製品を検出しました。今回の調査区は、この調査区の南側にあたり、南端19m分を1965年度の調査区（平城第29次）と重複させて、東西6m、南北111mに設定しました。調査は2010年1月18日開始し、4月28日に終了しました。

発掘調査の結果、今回の調査区では基幹排水路は検出されませんでした。レーダーによる地下探査の成果と合わせると、東方官衙地区の中央を南北に流れる基幹排水路は、このブロックを貫いてさらに南流すると考えられます。そのため、今回の調査区は基幹排水路の東側の区画に相当すると考えられます。検出した遺構は、調査区北半で東西方向の築地塀4条、礎石建物3棟、南半で道路1条、東西溝4条、掘立柱塀5条、掘立柱東西棟建物2棟です。なかでも調査区北半で、基壇を伴う東西棟の礎石建物が、築地塀を挟んで1棟ずつ南北に建ち並んでいる様子を確認した点は注目されます。たとえば、北から数えて1棟目は、南北に庇を持ち基壇の南縁には石組溝を伴っています。また3棟目は、建物を支えた柱の礎石の間に、床を支えたとみられる小さな礎石が並び、礎石建物にしては珍しい床張りの建物だったことが分りました。このように礎石建物の構造はそれぞれが異なっています。

さらに、レーダーによる地下探査の成果を参考にしますと、基幹排水路の東側の区画には、今回発掘した3棟の礎石建物とならんで南北にもう一列、3

棟の基壇を伴う東西棟の礎石建物を確認できることから、東西棟の礎石建物が東西に2棟ずつ、南北方向に3列にわたって合計6棟並ぶことがわかりました。さらに、この6棟の礎石建物からなる官衙区画の南と北は、築地塀の外側を宮内道路で区画されていました。

このように、基壇を伴う礎石建物ごとに築地塀で細かく区分されている区画の様子は、これまでの平城宮の調査ではあまり例をみません。役所の建物配置としても異例で、どの役所の如何なる性格の区域か明確ではありませんが、類似の配置をもつ役所としては、奈良時代後半の式部省と兵部省の北半が挙げられます。式部省・兵部省では築地塀で仕切られた区画に礎石建物が1棟ずつ配置されており、執務場所とみられています。

今回の役所では、それが連続して3列設けられ、しかもそれぞれの建物の構造が異なるという極めて珍しい特徴をもっています。官人の執務空間であるとしても、如何なる役所の施設なのか、あるいはそれぞれが異なる役所なのか等、興味深い課題が残されました。

（都城発掘調査部 国武 貞克）



平城第466次調査区北半(南東から)

【キトラ古墳壁画陶板模型】

今年のキトラ古墳壁画画展の展示物の目玉の一つに、「キトラ古墳陶板模型」があります。これはキトラ古墳石室内部の複製品ですが、これまでのものと大きく異なる点があります。それは、2004年に石室内部で撮影されたフォトマップデータを元にした写真を陶板に焼成し、何度も色味や質感の調整をおこない、

さらに、2万枚を超える写真を検討しながら、細かな凹凸を施したという点です。

模型は、様々な展示方法にも対応できるように作成しており、例えば各壁は個別に取り外して展示することもできます。また、石室の床面は実物と異なり平滑に仕上げていますが、これは南壁と北壁を取り外し、中を歩いていただけるような展示方法も視

写真上：凹凸の検討中

写真中：陶板模型の組立作業

写真下：展示風景



野にいれることです。

そして、この陶板模型の大きな強みは、焼物であることから強度も十分で、変色や劣化の心配が無いことです。このキトラ古墳壁画陶板模型は色褪せることなく、2004年のキトラ古墳の姿を後世に長く伝える貴重なレプリカとなることでしょう。

(飛鳥資料館 成田 型)

キトラ古墳壁画陶板模型



キトラ古墳壁画四神特別展示閉幕

飛鳥資料館では、今年の4月16日から飛鳥資料館開館35周年と平城遷都1300年祭を記念して「キトラ古墳壁画四神」展をおこない、5月15日からは壁画の実物を展示する特別公開をおこないました。今回の特別公開は、2006年から毎年続けてきたキトラ古墳壁画公開の集大成ともいえるものとなりました。

今年は、キトラ古墳の四神全てが初めて一堂に会する特別公開であったため、開催前から非常に注目度の高いものとなりました。そして、その中でも最も注目されたのは、初公開となる南壁の朱雀でした。高松塚古墳では確認することができなかったために、キトラ古墳の朱雀は極彩色壁画として国内で初めて確認されたもので、その朱色の美しい羽を広げた姿に魅せられた方が多かったのではないかでしょうか。

さらに特別公開の期間中は、お越しいただいたお客様に、より楽しんでいただくために様々なイベントをおこないました。毎週土曜日の夜には、飛鳥資料館の前庭にある須弥山石の中心として周囲にロウソクを並べ、さらに今年初公開となる朱雀をロウソクで浮かび上がらせました。すると、夕暮れ時には幻想的な風景が資料館の庭に広がり、普段とは違った雰囲気を感じていただけたかと思います。また、毎週日曜日には様々な催しがおこなわれ、飛鳥の食を体験するイベントでは餅つき大会をおこない、ご家族で参加していただくなど、大変な盛り上がりを

みせました。また前庭では、天平の古代衣装を着て記念撮影をするイベントをおこないましたが、これも大盛況で撮影待ちの行列ができたほどでした。そして、夕暮れ時には樅原市吹奏楽団やバンドによる演奏もおこなわれ、今回の特別展示に華をそえてくれました。四神同時公開に加え、このようなイベントの助けもあり、日本全国からたいへん多くのお客様にお越しいただきました。その結果として今回の特別公開では、これまでのキトラ展で過去最多入場数であった、2006年の白虎特別公開の来館者数6万人を上回る、約9万万のお客様にご来場いただき、6月13日をもって大変盛況の内に幕を閉じることができました。まさに、5年間におよぶキトラ古墳壁画の公開の集大成に相応しい展覧会であったといえるでしょう。

2006年から毎年春におこなってきたキトラ古墳壁画の特別展示ですが、今回で公開は一段落し、今後の展示に関しては現在のところは未定となっています。キトラ古墳壁画には、調査研究や保存修復、未公開の天文図や十二支の一部に関しての扱いなど、まだまだこれからどのようにするべきか知恵をしばらくなければならない事柄が多くあり、今後の検討課題といえます。キトラ古墳壁画の四神や十二支を変わらぬ姿で、多くのお客様に1日でも早く御覧いただけるよう努力していきます。

(飛鳥資料館 成田 勝)



特別展示会場の様子



資料館でおこなわれた光の回廊

遼寧省朝陽地区隋唐墓副葬品の調査

遼寧省文物考古研究所との共同研究では、2009年度も例年通り3月に遼寧省瀋陽市の遼寧省文物考古研究所で朝陽地区隋唐墓の副葬品の調査をおこないました。今回は3月9日から16日までの8日間、調査とともに研究発表もおこなってきました。調査者は、所外の研究者も含めて計6名でした。

今回の調査対象は遼寧省文物考古研究所などによって朝陽市で発掘調査された、楊和墓出土陶俑を主体として、中山村唐墓出土彩絵俑、紡績路立体交差橋墓出土俑、双塔区小区点式樓出土銅製品等の副葬品です。特に陶俑と陶磁器を中心に、全体で63件の副葬品を調査しました。遺物の撮影、熟覧・調査書作成、実測、3Dデジタイザによる計測・データ採取など、考古学的調査が主体でした。既に陶俑等では型作りの技法について詳細に調べ、規格性の高さを明らかにしてきましたが、今回、鉄製鉄についても高い規格性を確かめることができました。

2010年度は、調査報告・研究論集の作成に取りかかる予定ですが、そのための中間報告とも言える研究発表を3月15日に文物考古研究所でおこないました。日本側からは3名の研究者がそれぞれ、「遼寧省出土の釉陶」「探査と3D計測」「唐代鉄製鉄の製作技法」をテーマに講演しました。

それぞれの講演後、活発な質疑応答がなされました。特に3D計測などの最新の調査技術については、中国側研究者に強い印象を与えたようで、大きな反響がありました。今後も様々な機会を捉えて、本研究所のもつている調査技術などについても、積極的に紹介することが重要だと改めて感じました。

(都城発掘調査部 小池伸彦)



探査と3D計測についての研究発表

特別講演会（東京会場）開催

5月15日（土）、東京両国の江戸東京博物館ホールで、特別講演会を開催しました。

これは平城京遷都1300年祭を機会に、関東にも奈良文化財研究所のことを知ってもらいたいという趣旨で実施したものです。毎年春秋に開催する平城宮跡資料館講堂での公開講演会は106回を数えるまでになっていますが、奈良県外に出るのはこれが初めての試みでした。

「今、よみがえる平城京」をテーマに、特設のホームページやちらし・ポスターなどで関東方面に呼びかけたところ、定員400名に対し申し込みは700名を超え、手応えは充分。当日は開場間もなく客席が埋まり始め、開演時には満席となりました。

まず、田辺征夫所長が「平城宮跡のむかしと今」と題した基調ミニ講演で平城宮跡の歴史と現状を紹介し、島田敏男建造物研究室長が「大極殿復原」、馬場基主任研究員が「木簡が語る平城京の時代」の講演をおこないました。最後は読売新聞大阪本社編集委員の柳林修氏が講演者に質問する形式のディスカッションでした。遷都が繰り返された理由や平城宮跡の復原の是非など、鋭い切り口で質問するコーディネーターと、応じる講演者とのやりとりに、時には拍手が起こるほど会場は盛り上がり、3時間にわたる講演会は井上和人副所長の閉会挨拶に至るまで熱気に満ちるものとなりました。

奈良への关心の高さを感じることができた今回の経験を踏まえて、2回目の東京特別講演会を、9月25日に有楽町朝日ホールで開催します。

(研究支援推進部 永井あづ子)



ディスカッション「講演者に聞く」

キトラ古墳壁画展の展示室

大変盛況の内に幕を閉じた「キトラ古墳壁画四神」の展覧会でしたが、展示室の壁面の色が塗り分けられていることにお気づきになられた方はいらっしゃるでしょうか。通常では常設展が行われている第一展示室ですが、今回のキトラ古墳特別展示のために3月に入ってから閉鎖をおこない、展示ケースや遺物の移動に加えて、キトラ特別展をおこなうために必要な壁面を設置し、短期間で姿をガラリと変えることになりました。

キトラ展のために設置された壁面をみると、黄、青、黒、白、赤の5色で塗り分けられていることに気付きます。これは、五行思想による塗り分けを、展示室の壁面に表現したもので、部屋の中心にあたる壁は黄色、青龍のケースの前は青、玄武の前は黒、白虎の前は白、朱雀の前は赤といったように壁が塗り分けられています。皆様に、四神の世界観をより視覚的にご理解いただけるためにこのような配色としましたが、いかがでした



特別展示中の第一展示室

■ お知らせ

特別公開講演会（東京会場）

2010年9月25日（土）

於：有楽町朝日ホール

テーマ「古代はいま」（予定）

平城宮跡資料館 夏期企画展

2010年7月10日（土）～8月31日（火）

「平城宮跡 今・昔・岡田庄三写真展」

飛鳥資料館 夏期企画展

2010年7月16日（金）～9月5日（日）

「小さな石器の大きな物語」

平城宮跡歴史文化講座（第12回）

（NPO平城宮跡サポートネットワーク主催）

2010年9月25日（土）午後1時30分～

於：平城宮跡資料館講堂

「遺構・遺物からのアプローチ」

富山大学教授 黒崎直

■ 記録

埋蔵文化財担当者専門研修

○建築構造調査課程

2010年6月14日～18日

16名

現地説明会

○平城第466次発掘調査（平城宮東方官衙）

2010年4月17日（土）

750名

特別公開講演会（東京会場）

2010年5月15日（土）於：江戸東京博物館

「平城宮跡のむかしと今」田辺 征夫 所長

「大極殿復原」島田 敏男 文化遺産部建造物室長

でしょうか。

キトラ展が終わった現在では5色の壁面も撤去が始っており、少しあびしいような気もしますが、常設展示に復帰するべく急ピッチで作業を進めています。そして7月からは、皆様にこれまで通りの飛鳥の歴史を紹介する常設展示を御覧いただける予定ですので、どうぞ今しばらくお待ちください。

（飛鳥資料館 成田聖）

「木簡が語る平城京の時代」

馬場 基 都城発掘調査部主任研究員

ディスカッション「講演者聞く」

コーディネーター 柳林修

読売新聞大阪本社編集委員

入場者409名

公開講演会（第106回）

2010年6月12日（土）於：平城宮跡資料館講堂

ミニ講演「古代の食卓復元を再考してみよう」

田辺 征夫 所長

「平城遷瓦 - 都がうつる。瓦もうつる -」

中川 あや 都城発掘調査部研究員

「古代における日本と新羅の交流」

高田 貴太 都城発掘調査部研究員

入場者222名

■ 最近の本一員の著作から

○渡辺 晃宏『平城京一三〇〇年「全検証」』

柏書房、2010年4月

○金田 明大『文化財のための三次元計測』

岩田書院、2010年5月

○豊島 直博『鉄製武器の流通と初期国家形成』

培書房、2010年5月

編集「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.jp/>

Eメール jimu@nabunken.go.jp

発行年月 2010年6月